The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『図書編』の書誌学的考察
Author(s)	矢羽野, 隆男
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1994, 28, p. 15-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7827
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『図書編』の書誌学的考察

矢羽野隆男

序

章潢の『図書編』は、明代史研究に有用な史料を提供する書として評価され、また同時代に編纂された王圻の『三才図会』と並んで多くの図を収録する特色ある類書として注目されてはいる。しかし『図書編』自体に対する研究はほとんどなされていない。私はこの特異な『図書編』の研究を行うに当たり、まず、その基礎作業として、その編纂刊行の経緯及び版本の書誌学的な事項を考察する。

一　章潢の学問と『図書編』の編纂と

章潢(1)（嘉靖六年・一五二七～万暦三六年・一六〇八）、字は本清、号は斗津あるいは聘君という。江西南昌の人。『明儒学案』は章潢を「江右王門」に配し、その学派の特徴を概括して「姚江の学　惟だ江右　其の伝を得たりと為すのみ。（中略）是の時、越中に流弊錯出し、師説を挾み以て学者の口を杜ぐ。而して江右独り能く之を破る。

陽明の道頼りて以て墜ちず。蓋し陽明一生の精神倶に江右に在り。亦た其の感応の理、宜なり」（巻一六「江右王門学案」序）と述べ、江右王門学派が王学の正統・右派の中心で、浙江王学左派の良知現成説の流弊に批判を加えたことを評価している。また章潢個人の学問については「止修を論ずれば李見羅に近く、帰寂を論ずれば聶双江に近し」（『明儒学案』巻二四）と評するが如く、「止修」を学の宗旨とした正統派の李材（号は見羅）と「帰寂」を唱えた右派の聶豹（号は双江）とに通ずる性質を具えていた。

章潢はこのような学問傾向から「孔子の皜皜として尚う可からざるは、以て濯い以て暴して後に此れ有るなり。〔近頃の学者は〕乃ち遽に衆人見在の習心の未だ嘗て暴濯せざる者を以て、強いて同じくして聖の位に立躋せしめんとするは、吾れの知る所に非ざるなり」(2)（同上「章本清論学書」）と「暴」「濯」を経ざるありのままの心を聖人と同じと見る左派の良知現成説を否定している。彼は博く四書五経を攻究し、『周易象義』『学詩原体』『書経原始』『春秋測義』『学礼箚記』『論孟約言』等を著した。(3) また講友との講学会を重視し、隆慶二年（一五六八・章潢四二歳）講学の場として南昌の会城内に此洗堂を構え、またしばしば他所へ出向き講友と会した。繁瑣な読書窮理や講友との切磋を不要とし、あるがままが完全な良知とした左派を否定したのは、江右の学風と章潢の学問の性質からすれば当然の帰結であった。そして四書五経に止まらぬ博い読書窮理が類書『図書編』を生んだと言える。

ところで〈図象の類書〉と言える『図書編』は、章潢の易学研究と無関係に論ずべきではない。それは、『図書編』が宋代易学の一派（図書学派）以来の思惟を根底としているからである。(4)「章斗津先生年譜」（以下「年譜」と略記）に拠れば、嘉靖三八年（一五五九・章潢三三歳）の条に「始めて『易』を学ぶ」とし、万暦四年（一五七六・章潢五〇歳）の条に「『易経象義』成る」と、彼の易学の一つの成果である『周易象義』（『易経象義』）を完成

したとする。『図書編』がこれと同時期に編纂されていることからもそれが理解できよう。ただ『図書編』の成立時期については問題がある。

「年譜」に拠れば、嘉靖四一年（一五六一・章潢三六歳）の条に「始めて『図書編』を輯す」とその編纂の開始時期を明記するが、その成立時期は明記しない。この点について『四庫全書総目提要』（以下『総目提要』と略記）が次のように考察する。「其の門人万尚（ママ）（恐らく「烈」脱字）が前序に称すらく、是の編は嘉靖壬戌（四一年）に肇まり、万歴丁丑（ママ）（五年・一五七七）に成ると。潢の年譜を考うるに乃ち称すらく、万歴五年丁丑『論世編』成ると。又た称すらく、万歴十三年乙酉（一五八五）『図書編』を出して鄧元錫の『函史』と相証すと。然らば則ち初名は『論世編』、後に乃ち此の名を改む[5]」（巻一三六・子部・類書類二）すなわち、門人万尚烈の序に万暦五年に『図書編』が完成したとあり、また「年譜」に万暦一三年に章潢が『図書編』を出して、講友鄧元錫の『函史』と証明し合ったとあることから、『図書編』は万暦五年には既に完成し、「年譜」の万暦五年の条に「『論世編』成る」とある『論世編』は『図書編』の初名であり、後に（遅くとも万暦一三年迄には）改名されたとする。後述のように、万尚烈は万暦五年以前から章潢に学び、かつ『図書編』の刊行に尽力した人物であるから、その序の記載は信頼できよう。また『図書編』は、「国家実用に裨有り」（「図書編自叙」）とする『通典』『文献通考』『大学衍義補』の系統を受け継ぐ類纂の書として章潢自らが位置付け、明末の経世致用の思潮にも通じる編纂意図から成立した著作でもあるから、初名を『論世編』と称したのも理解できる。よって『総目提要』に従って、『図書編』の一応の成立時期を万暦五年とするのは妥当であると考える。

もっともその後も補訂がなされた。そこで、以下『図書編』補訂の下限に関する先行の諸説を検討する。

① 王重民『中国善本書提要』（上海古籍出版社・一九八三年・三八二頁）は、『総目提要』の説を紹介したうえで、『図書編』の「地理編」に万暦八年（一五八〇）に成った王宗載の『四夷館考』を収録し、更に巻二九に所収の「輿地山海全図」は万暦二三年（一五九五）に利馬竇の世界図が南昌で刊行された後のものであることから、補訂は章潢の没した万暦三六年まで続けられたとする。

② 『明代名人伝』（コロンビア大学出版・一九七六年・上巻八四頁）は、『図書編』所収の世界図（「輿地山海全図」）には、マテオ・リッチが一六〇二年以後の地図から削去した北米大陸を横断する北西航路が見える他、リッチの一五八四年の世界図原本の特徴と思われる北極と南極とを中心とした二種の天頂投影図（「輿地図上」「輿地図下」）を収めていることから、章潢は一五八四年の世界図原本を収めたのであろうとする。

③ 鮎沢信太郎「月令広義所載の山海輿地図と其の系統」（『東洋地理思想史研究』所載・日本大学第三普通部・昭和一五年・六六頁）は、『図書編』所載の世界図は其の図説により、万暦三〇年（一六〇二）序刊の『月令広義』所載の利氏世界図に系統をひくものかと推測するが、利氏世界図は数種類あって現に見ることのできないものもあるので断定はできないとする。

④ 海野一隆「『広輿図』の反響」（『大阪大学教養部研究集録（人文・社会科学）』第二三輯・昭和五〇年発行・一三頁）は「巻首の万尚烈の序および章潢の年譜は、共に本書が万暦五年（一五七七）に完成したことを記すが、万暦一〇年に来華したマテオ・リッチの世界図を載せるから、章潢の没した万暦三六年（一六〇八）までは勿論、門人万尚烈の序文年紀の万暦四一年（一六一三）までは補訂が続けられたと見てよかろう」とする。

以上の説は『図書編』成立の下限をマテオ・リッチの世界図との関係から考察あるいは示唆するものである。し

かし、①は「万暦二三年に利馬竇の地図が南昌で刊行された」とするが、「〔万暦二三年〕南昌に在った利氏が建安王に地図を贈呈したことや又其れに類する話が彼の手記に見えるさうであるが、板木に彫刻されたものであるかどうかは明らかでない」（鮎沢氏前掲書所収「利馬竇の世界地図に就いて」三五～三六頁）とあり、章潢が万暦二三年に南昌で刊行された利氏世界図を見たことは確実ではない。②・③に関しても、③が述べるような理由のため、利氏と世界図との関係で確実な下限を求めるのは問題であろう。また④が、万暦一〇年来華のリッチの世界図を載せるからという理由で章潢の死後万暦四一年にまで補訂の下限を引き下げる根拠は未詳である。門人万尚烈の序文には彼自身が補訂を行ったことは見えず、また彼は師の書『図書編』を周敦頤の『通書』や邵雍の『皇極経世書』に匹敵する書として絶対視している。

要するに、補訂の下限は確定し難い。ただ『四夷館考』・利氏世界図の補訂以外にも、例えば、講友の王之士（字は欲立、号は秦関）が携えて来た「丹書図」（「年譜」万暦一六年（一五八八）の条）を見た章潢が感激し、王之士によって齎された旨を記して『図書編』巻一〇にそれを収めていることからも、機会ある毎に補訂したことは確実である。万尚烈の「刻章聘君先生図書編丐叙」（以下「丐叙」と略記）に「昔人　平生の精力盡く此の書に在りと謂う。[6] 余の師　章聘君先生『図書編』の謂なり」と言うのに拠れば、章潢の最晩年まで補訂が続けられた一生の著述であると考えるのが隠当であろう。

二　『図書編』の刊行

『図書編』の刊行は章潢の生前から何度か計画された。万暦五年に『図書編』が一応の完成を見て間もなく、江

西巡撫の劉斯潔（字は我山。万暦六年・一五七八～万暦七年在任）がその刻を命じたが、郡の財政縮小の為に実現しなかった。次いで南昌知府の范涞（字は晞陽。万暦一三年・一五八五～万暦一八年・一五九〇在任）等が刻書を請け合ったが、予算の折り合いがつかず刪輯することが検討された。しかし章潢の「其の刪するよりは寧ろ之れを竢たん」との意志に従って、これも刻されることなく終わった。その後、万暦三一年（一六〇三）から翌年にかけて総憲の温一斎が燕市の出版業者に原稿を渡すに至ったが、間もなく彼が任を解かれた為に計画は中止された。

刊行計画が中止される中、門人万尚烈（字は思文）・丁此召（字は右成）は刊行を計画した。「年譜」に拠れば、万尚烈は隆慶元年（一五六七）始めて章潢の講学会に参加し、『図書編』が一応完成した万暦五年に丁此召と共に章潢に師事した。彼らは師の大著が刊行されずに埋もれるのを看過できなかった。だがその計画も進まぬうちに、万暦三三年（一六〇三）丁此召は世を去る。万尚烈は『図書編』の刊行は師と学友への責務であると誓った。

万尚烈が福建邵武府の同知に在任中（万暦三四年・一六〇六～万暦四〇年・一六一二在任）の万暦三六年（一六〇八）章潢は『図書編』の刊行を見ぬまま八二歳の生涯を終える。師の死によって万尚烈が刊行の遅れた自責の念と早期刊行の誓いを強くしたことが想像できる。彼は邵武府同知として在任中の俸禄を専ら刊行の費用に充てた。その後、刑部郎に昇って京師に移ったこともあって更に一年遅れたが、万暦四一年（一六一三）兵部尚書の涂宗濬（字は鏡源）・鄢陵令の張舜典（字は心虞）・門人汪汝鳳（字は鳴瑞）らの資金援助も得て、遂に完成させた。万尚烈「丐敍」は「是の編の布き難きこと　誠に大異なるかな」と刻が成るまでの多難を述べている。この刊行に当たって、万尚烈は「敢えて大方（有名な）の識者の藻を摛（し）きて之れが叙を為らんことを丐（こ）う」て「万暦癸丑（四一年）二月既望」付けの「刻章聘君先生図書編丐叙」と題する序文を付した。

その後、万尚烈は貴州平越の知府に左遷されたが暫くして退休を乞い、故郷の江西新建県へ帰り門を閉ざして学に努めた。そして天啓三年（一六二三）彼は応天府（南京）に於て兵部侍郎の任に在った岳元声（字は之初、号は潜初子）に序を乞い、「〔万氏の〕師説を守り君子を俟つの苦心に感じ」（岳氏序）た岳元声が「天啓癸亥（三年）中秋」付けの序文等を付したものが刊行された。

以上は万尚烈の尽力によって刊行されたものであるが、彼とは無関係に刊行されたものが有ったようである。『南昌県志』（乾隆一六年刊本）巻六二・芸文・序中および『南昌文徴』（中華民国二四年刊本）巻六・序二に朱明睿の「図書編序」が収められている。『江西志』（康熙五九年刊本）巻七〇・人物所収の伝に拠れば、朱明睿、字は太虚、南昌の人、天啓の進士。李自成の京師侵入に遭い、清朝に入って以後は礼部侍郎となって尚書の事を署したが、間もなく官を去り、八七歳にて没したという。これに拠れば、章潢と同郷の、明末清初に生きた人物である。その序に「今、其の（章潢の）孫某某、是の書（『図書編』）を刻し以て世に行い、余に文を為り以て之れに序するを乞う。余辞さずして之れが文を為る」とあり、章潢の孫が『図書編』を刻した際に朱明睿に序を乞うたことがわかる。この序は日付を欠くために、いつ頃に刻が成ったか正確な時期は未詳であるが、明末清初のことと思われる。また朱明睿序を付した本は管見のところ諸目録に見えず所在が明らかではない。

三　版本について

『図書編』には以下の版本がある。

①万暦癸丑（四一年）序刊本（以上「万暦序刊本」と略記）。　万尚烈が万暦四一年に刊行した本である。首巻に

以下を収む。A「刻章聘君先生図書編丐叙」（序末に「万暦癸丑二月既望新建門人万尚烈書於西部白雲楼」と記す）、B「図書編自叙」（序末に「南昌後学章潢本清甫」と記す。「図書編原」を附す）、C「図書編凡例」、D「章斗津先生年譜」（第二行に「門人丘日敬万尚烈周誠学男自省編」と記す）、E「図書編採輯考証書目」、F「図書編目録」[7]。本文は、大二一・九×一四・四糎。四周単辺。有界。毎半葉一〇行。行二二字。版心「図書編（巻数）（葉数）」。無魚尾。巻頭に「図書編巻之一」とあり、第二行に「南昌後学章潢本清甫編」とある（巻二以下も同じ）。巻一二七の末に「是役也、鄢陵令張雞山助貲拾両、先生門人汪鳴陽助貲伍拾両、張諱舜典字心虞陝西鳳翔人、汪諱汝鳳字鳴瑞徽州歙県人、金陵孫良富刊督」の木記が有る。巻尾に以下を付録する。G「章斗津先生行状」（末に「万暦辛亥（三九年・一六一一）中秋書於閩昭武清政堂」と記す）、H「此洗堂記」（末に「万暦己酉歳（三七年・一六〇九）秋七月之吉同邑教下友人朱試謹撰」と記す）

ここでA～Hの必要なものに関して略述する。Aは万尚烈が刊行に際して『図書編』編纂刊行の経緯を記し、識者の序文を乞うたもの。Bは章潢の自序で『図書編』編纂の意図を記し、それに付された「図書編原」は『図書編』の構成の原理を記したもの。Dは丘日敬・万尚烈・周誠学ら門人および長子の自省の編んだ年譜。万暦癸丑の記事で終わっており、刊行時に編まれたものである。Eは編纂考証に用いられた二一五種の文献の一覧。Gは章潢没後三年の万暦三九年に章潢門人及び自省に嘱されて福建邵武府同知として在任中の万尚烈が記した行状。Hは章潢の死没の翌年万暦三七年に自省に乞われた章潢の友人朱試（字は以功）が、此洗堂に於ける章潢の学問を略述して門人が師恩を忘れないことを示した文章。これはGに「先生没するに及び、友人朱以功　又た其の堂（此洗堂）に即きて之れが記を為る。（中略）因りて併せて左に刻し志を忘れずとしか云う」とあるように、もとGに付刻され、

『図書編』刊行時にGと共に付録されたものである。

②天啓癸亥（三年）序刊本（以下「天啓序刊本」と略記）。天啓三年に万尚烈が岳元声に序を乞い、その岳氏序を付したもので、次の二種がある。

（イ）首巻に以下を収む。a「図書編叙」（第二行に「柴辟岳元声述」、序末に「天啓癸亥中秋吉旦書」と記す）、b「図書編家蔵記」（末に「潜初子識」と記す）、c「図書編自叙」（「図書編原」を付す）、d「図書編凡例」、e「章聘君先生図書編求序始末引」（末に「万暦癸丑二月既望新建門人万尚烈書於西部白雲楼」と記す）、f「図書編採輯考証書目」、g「図書編目録」。本文の版式は万暦序刊本と同じ。但し巻頭第二行に「潜初子岳元声訂　南昌後学章潢本清甫編」とある（巻二以下も同じ）。巻尾に「行状」「此洗堂記」を付録せず。

首巻のc・d・f・gは万暦序刊本に付すものと同じ版を用いる。aは岳元声の序。bは主として天啓三年に至る迄の『図書編』刊行の経緯を記した文章。eは万暦序刊本のAの字句を一部改めて新たに刻したもの。本文は、字体・匡郭の欠損の様子から万暦序刊本と同じ版を用い、ただ毎巻第一葉第二行の「潜初子岳元声訂」のみを嵌刻したものと見える。すなわち万暦序刊本の後修本である。

（ロ）見返に「潜初先生手緝／図書編／忠武堂蔵板」とある。首巻は天啓序刊本（イ）と同じ。本文は万暦序刊本・（イ）の版式と同じ。但し巻頭第一行に「南昌後学章潢本清甫編」とあり、第二行に「潜初子岳元声訂　後学男岳潢重較」とある（巻二以下は（イ）と同じ）。巻尾に「行状」「此洗堂記」を付録せず。

本文は、字体・匡郭の欠損の様子から、（イ）と同様に万暦序刊本の後修本。また（イ）と比較して、巻頭第二行「南昌後学章潢本清甫編」を第一行へ移し、第二行に「後学男岳潢重較」を嵌刻したように見え、（イ）の一部

を改めたもの。要するに、万暦序刊本の後修本が天啓序刊本（イ）で、更にその後修本が天啓序刊本（ロ）となる。

これがいつ刊行されたか時期は明らかではないが、王重民『中国善本書提要』（前出）に拠れば「按ずるに原印本に「後学男岳潢重較」の一行無し。此の行は当に崇禎の間の刷印の時に竄入する者と為すべし」と、崇禎年間の刊行とする。また『内閣文庫漢籍分類目録』にはこれを「清再修」とする。刊行が清代に係る可能性もあるが、避諱が厳格になった康熙帝以後の諱を避けておらず、天啓三年以後、崇禎年間、遅くとも康熙までとせねばならない。

③朱明睿序刊本（未見）。前述のように明末清初に朱明睿の序を付した本が刊行されたようだが、所在未詳。

④四庫全書本。万暦序刊本・天啓序刊本が首巻に収めた序など全て無し。巻尾に「章斗津先生行状」を付録する。

これがどの本を底本としたかは、『総目提要』は「河南巡撫採進本」とするのみで明らかではない。しかし『総目提要』に「其門人万尚前序称、是編肇於嘉靖壬戌、成於万歴丁丑」と『図書編』編纂の始末を万尚烈の「前序」に拠って述べる。天啓序刊本にも万尚烈が同じ内容を記した「章聘君先生図書編求序始末引」が収められるが、これを「前序」とは称し難い。また天啓序刊本にはその前に編纂の始末を記した岳元声の「図書編家蔵記」があり、天啓序刊本が底本ならば岳氏の「家蔵記」を引いてもよい訳で、敢えて「求序始末引」を引用する必然性に欠く。つまり「前序」とは万暦序刊本所収の万尚烈の「丐叙」であり、よって万暦序刊本を底本としたと推測できる。

ところで四庫館が各地から遺書を採集した際に、『図書編』は「群経諸史暨び稗官の紀載を博采し、天文地理礼楽刑政等の門に分かち、類を以て彙次す。其の大なる者を識ると謂う可し」[8]（『浙江採集遺書総録』已集・儒家類）とされ、また『総目提要』に『三才図会』と比較して「〔『三才図会』は〕〔章〕潢の古今を引拠し本末を詳賅するに及ばず」とされ、「採摭繁富、条理分明、浩博の中に其の精粋を取る。博物の資・経世の用に於ても亦た未だ嘗

て百一の裨無くんばあらず」とされ高く評価された。

だがその一方で、清朝の忌諱に触れる書として禁書の扱いを受けた。その原因は「辺事を論じ多く違礙有り」（国学基本叢書『禁書総目』補遺二）、「巻四十三の内に忌諱有り。応に燬すべし」（『書目類編』一六所収「内閣大庫書檔旧目補」補目四、応銷燬書籍総檔、続弁第五次応燬書）と言うように、辺防とりわけ北辺の防衛を論じた巻四三に在った。よって四庫全書本は違礙部分の刪除あるいは字句の改変が有り、本来の内容のままではない。

ただ、類書は類纂の書で全体が一貫した主張を為すものではないので違礙箇所を抽燬するだけでよいとの違礙書取締り規準が有ったために全燬を免れた。しかし禁書の扱いを受けたことで流布しなかったと言える。

最後に今後の『図書編』研究の便を考えて最近刊行された普及本について述べておく。

⑤万暦四一年刊本影印本（成文出版社・中華民国六〇年）。首巻に「刻章聘君先生図書編丐叙」「図書編自叙」（「図書編原」を付す）「図書編凡例」「章斗津先生年譜」「図書編採輯書目」「図書編目録」を収め、前述の万暦序刊本の影印。しかし本文については、巻頭の「図書編巻之一」に続けて「南昌後学章潢本清甫編」、第二行に「潜初子岳元声訂　後学男岳潢重較」とあり、また巻尾に「行状」「此洗堂記」を付録せず、天啓序刊本（ロ）の影印である。扉に「拠明章潢編岳元声訂明万暦四十一年刊本影印」とあるが、前述の『図書編』刊行の経緯から考えても、岳氏の訂を経たものが万暦序刊本であるはずがなく、本文は天啓序刊本の影印とせねばならない。

⑥『影印四庫全書珍本』五集所収本（台湾商務印書館発行・中華民国六十三年）

⑥′なお『四庫全書』の影印本から類書関係を収録した『四庫類書叢刊』所収本（上海古籍出版社発行・一九九二）もある。これらは共に『四庫全書』文淵閣本の影印で、首に書前提要を、巻尾に「章斗津先生行状」を付す。

結

以上『図書編』編纂刊行の経緯及び版本調査の結果を述べた。今後はこれを踏んで、『図書編』構成の特徴、〈図象の類書〉成立の理由等『図書編』自体の問題、そしてそれを生んだ章潢の学問や明末の思潮との関係について考察を進める予定である。

注

(1) 章潢の伝記は「章斗津先生年譜」「章斗津先生行状」に詳しい。

(2) 『孟子』滕文公篇上「他日、子夏・子張・子游、以有若似聖人、欲以所事孔子事之、彊曾子。曾子曰、『江漢以濯之、秋陽以暴之、皜皜乎不可尚已』」を踏む。

(3) 『明史』に『詩経原体』『春秋竊義』『礼記箚言』『論語約言』とあるが、今「行状」記載の書名に従う。

(4) 易学と『図書編』との関係については『中国研究集刊』（大阪大学中国哲学研究室編輯）列号に発表予定。

(5) 書前提要にはこの記述がない。書前提要と『総目提要』とについては、郭伯恭『四庫全書纂修考』第一一章・二「総目提要与原書提要之繁簡」（台湾商務印書館・中華民国五六年）参照。

(6) 朱熹は、司馬光（一〇一九～一〇八六）の『資治通鑑』進書表（一〇八四）の言葉「臣之精力、尽於此書」を踏み、自身が死の直前までその注釈を補訂したという『大学』について「温公作『通鑑』言『臣平生精力、尽在此書』。某於『大学』亦然」（『朱子語類』巻一四）と言う。

(7) 万暦序刊本のA～F、天啓序刊本a～gの順序は本によって異なる。今、A～Fを京大人文研所蔵本一、a～gを内閣文庫所蔵本三（付記参照）の順序に従って記す。

(8) 『論語』子張篇に「文武之道、未墜於地、在人。賢者識其大者、不賢者識其小者」とあり、「識其大者」とは、瑣末な事ではなく重大なものを知っているとの意味であろう。

〔付記〕版本について、京都大学人文科学研究所・東京大学東洋文化研究所・内閣文庫・蓬左文庫所蔵の諸本を調査した。以下各機関の漢籍分類目録の記載を略記し、それが本論考のどの版本に該当するか示す。〔京大人文研〕一、万暦四一年新建万尚烈等刊本――万暦序刊本。二、天啓三年序刊本――天啓序刊本（ロ）。〔東大東文研〕一、万暦四一年新建万尚烈等刊本――万暦序刊本。（『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』には「天啓三年序金陵孫氏刊本、忠武堂蔵板」なる本が見えるが、実見できず）。〔内閣文庫〕一、明刊本――万暦序刊本。二、一と同版本――万暦序刊本。三、一と同版本（無年譜・清修）――天啓序刊本（イ）。四、一と同版本（無年譜・清再修）――天啓序刊本（ロ）。〔蓬左文庫〕万暦四一年涂鏡源等刊、天啓三年岳元声印本――天啓序刊本（イ）。

（四天王寺国際仏教大学専任講師）